古典落語 第二巻

古典落語

第二期　第三巻

飯島友治編

筑摩書房版

古典落語

第二期　第三巻

昭和四十七年三月二十日第一刷発行
昭和五十年八月二十五日第三刷発行

編　者　飯島友治
発行者　井上達三
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話　東京　二九一―七六五一（代表）
郵便番号　一〇一―九一
振替東京六―四一二三

印刷所　暁印刷
製本所　矢島製本

函デザイン・落合　茂

（分類）0376（製品）17108（出版社）4604

まえがき

編者

落語ほどやさしい芸はないという、また、落語ほどむずかしい芸もないという。素人芸でも喝采を博するし、腕達者がいつも感銘を与えるとは限らぬからである。扇子一本と手拭一筋で演じ出される空間には、人生の機微が、さわやかな機知とともにあふれ出る。おおらかな人間の営為を、共感の微笑で包むのが落語の世界である。前受けをねらった笑いでうずめられた落語には、この微笑の小味な温もりが伝わりくることがない。旧い時代から庶民生活の哀歓を汲みあげて育まれてきた芸の豊饒さも、現代では感受されぬものとなりつつある。噺の中では田舎者は嘲弄の対象であるが、古典落語の本来の味わいになじめない現代人は、精神的な田舎者となったのであろうか。

古典落語は、正統な後継者をほとんど持たず、落語の背景となる社会的基盤も失い、近い将来、内容や演出の上で大きな変化があろう。磨かれ、刈りこまれて高座にあった芸は、どこまで堪能して味わえたのか。話芸としての洗練された語感も、時代の言葉とともに消えうせる運命にあるのではないか。ここに師匠方のお力添えを得て、先の『古典落語』五巻と合わせ、現存する代表的噺はほとんど全て収録できた。活字の限界の中で、話芸が築きあげてきた深い味わいを、書きとどめたい一念でこの仕事を始めたが、敬愛する三遊亭小圓朝師も今は病の身、師の芸の香は活字では伝うべくもない。

健康がすぐれず、発刊が著しく遅れた。編集部の横田三良氏、面谷哲郎氏の寛大なお励しに、深くお礼を申しあげる。落語が笑いだけのものとならず、人の心の豊かな稔りであらんことを。

凡例

一、江戸語の発音・抑揚などを、なるべく忠実に再現するために、適宜仮名の使い分けを行ない、特に片仮名の半音を多用した。

〔例〕「それァそうだ」「俺ァ」「何すンだァ」「へェェ」「話ィする」「この野郎ォ」等

また、軽く発音する場合にも片仮名の半音を用いた。

〔例〕「こん畜生」＝強い　「こッ畜生」＝軽い

二、ええの使い分け

〔例〕　ええ　きっかけに強く言う場合。「ええ…今日は」

　　肯定の返事と念を押す場合。「ええ、そうです」「本当ですよ、ええ」

　えゝ　返事の場合。「えゝ、そうです」

　えェ　軽い肯定の返事とえェを引き延ばす場合。「えェ…そォかい」「えェ、するとなにかい？」

　エえ　聞き返しと語尾を強める場合。「エえ？　もう済んだかい」「しっかりしろよ、エえ」

　　エェ　軽いきっかけ。「エェ一席お笑いを……」

三、漢字と仮名を、その意味・内容に従って、適宜使い分けた。

〔例〕　餅を一つやろうか　　酒を一杯だけ飲む

　　ひとつよろしくお願いします　　人がいっぱいいる

四、音写したとき意味のとりにくい言葉には漢字を用い、また適宜あて字を用いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〔例〕本当に・葬式・私・吉原・花魁・情人・相手・俺・懐中・食る等

五、古典落語においては間の取り方が重要とされるが、それを間の程度に従って、「…」「……」「……（長い間）…」を使い分けた。なお、言葉の省略の場合も「……」を用いた。

六、解説および本文の中で用いた記号の使い分けは、次の通り。

「　」＝会話・引用等

『　』＝題名・出典等

（　）＝演者の仕草・ト書等

〝　〟＝諺・和歌・川柳等

［　］＝編者による補足・語註・注釈等

〈　〉＝歌曲等を唄う場合

↓　＝「……参照」の略

！　＝語尾を強める場合

？　＝疑問符

七、仕草やト書は、本文の支障にならぬ限り詳しく入れた。なおト書の中で、上手〈とは演者の左手、上手後ろは奥座敷・勝手の方向を示し、下手はその反対になる。詳細については、第一巻『千早振る』の「芸談　稽古のために」を参照されたい。

目次

愛宕山　桂文楽　9
盃の殿様　三遊亭圓生　25
石返し　柳家小さん　47
化物使い　林家正蔵　65
泣き塩　古今亭志ん生　79
金玉医者　三遊亭小圓朝　89
星野屋　桂文楽　105
宮戸川　古今亭志ん生　119
夏泥　三遊亭小圓朝　129
喜撰小僧　春風亭柳枝　143

淀五郎　林家正蔵　159
庖丁　三遊亭圓生　173
坊主の遊び　古今亭志ん生　195
福禄寿　三遊亭小圓朝　211
こんにゃく問答　林家正蔵　229
掛取万歳　三遊亭圓生　251
代脈　蝶花楼馬楽　271
付・芸談　稽古のために
〔解説〕江戸時代の物価（飯島友治）

古典落語

第二期

第三卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

愛宕山

桂文楽

文楽師の『愛宕山』は、上方に古くからあった同名の噺を名人三代目円馬〔一九四五没、六五歳〕から受け継いで磨き上げた噺である。筋と登場人物、それに時代の設定も明治維新からそれほど経っていず、貨幣は円建になったが、まだ小判も流通していた頃としたのは大阪の演出と全く同じである。しかし描写の仕方には多少の違いがある。たとえば人物の設定では、文楽師は、遊びという遊びに飽きて何をしても興味がないという東京の旦那が、幇間どもを引き連れて京見物、というより見物させてやるという趣向であり、幇間も長年ひいきにしている性格のよい人物に描写している。一方、上方の演出では、京都島原辺の旦那が祇園町〔色町〕の芸者・舞妓連と、大阪の南地〔色町〕をしくじり祇園あたりで野幇間的にゴロゴロして稼いでいる一八と繁八を連れて、野掛〔郊外へ遊びに行くこと〕山行に出掛ける。その遊び方は茶屋の延長と考え、したがって野掛の件の描写に意を用いている。

また小判を放る件も、文楽師の所演には別にキッカケはなく、「……無駄と言えば遊ぶのがすでに無駄……」という言葉の通り、初めから放るつもりで、しかもそれを嫌味なく淡々と演出しているが、大阪式では、旦那は初めは放るつもりはさらさらなかったが、次のような会話でつい投げる羽目になる。

「〔一八〕ちょっと、お婆ッ！　土器五百枚！　……」「（びっくり）五百枚もどないにするねん？」「さ、さ…（手荒く受取り）旦那さんがやってはるぐらいなこと私かて……負けしまへん。こんなもん（土器をガリガリッと噛み、ややあってブッブッと吐き出す）」「（慌てて）食ったらあかへんがな……」「（捨てばちに）あァァあかん！　…こんな物もう止め！…（旦那のセリフ抜く）…いえ、いえ、大体わたいはナ土器ちゅうようなもんを放るのが…そもそも嫌いや。京都の人間咎ッたれてまっしゃろ。そやよって土器放って喜んどんねッ。こんなもん十枚放ったかて幾のもんだッねん。たかが土くれだっしゃろ……大阪の人間はこんなしょうもないもん放らしまへん」「（不審気に）ほう……と？　…大阪は何を放ッねん？」「（当然というように無雑作に）お金を放ります……金貨でも銀貨でも……五十銭玉や…みなつかんどいて、バラバラッと放りまんねん…土器なんてしょうむない！」

そこで小判を二十枚放る仕儀となるのである。ともあれ、この噺は名作であり、特に山場である一八が着物を裂い

てから登り着くまでの丁場は全く聴く者を魅了する。サゲはすぐれた「拍子落」

愛宕山　京都市右京区上嵯峨北部の愛宕山〔九二四メートル〕は古来修験者の道場とされており、また天狗の棲む山と考えられていたので、謡曲『鞍馬天狗』にも「…人のためには愛宕山…」と天狗のことが出ている。山頂には火防の神〔雷神〕＝愛宕神社〔江戸時代までは愛宕大権現〕が祭られ、また山内に勝軍地蔵・太郎坊天狗などの堂宇もある。京都には古くから〝〔一生の内に〕伊勢に七度、熊野へ三度、愛宕山には月詣り〟という譬があり、昔から四季を通じて参詣人が多かった。特に、七月三十一日〔もとは陰暦六月二四日〕は俗に愛宕千日詣といって、その日に参詣すると千日お詣りしたと同じご利益があるといわれ、たいへんな人出である。以前は参詣者は松明を点じて登山するため、火の行列が延々と山上まで続いたという。

狼に食われてしまえ　愛宕山は京都では第一の高い山であり、明治初期頃までは野猪をはじめ、鹿・狼・兎などもたくさんいたという。

大将　親しみをもった敬称的二人称。幇間・落語家などは、つい最近まで旦那と呼ぶ代わりに盛んに使っていた。一方、「どうだァ大将！　暮は大丈夫か」「神田の大将…とうとう夜逃げェしたとよ」などと、侮称的にも使える含みの多い言葉である。「きみ」「貴様」「大将」など雰囲気のある言葉使いは、文楽師の得意であった。

九段坂　現在はなだらかで楽々と登れるが、大正頃までは距離は現在の半分程度で、まことに急勾配、年配者が登るには骨の折れる坂であった。名は江戸時代、急坂のため、登り易いように九ツの段に仕切られていたのによる。

こちゃえ節　天保三年〔一八三二〕頃から江戸で流行した民謡。次の代表的歌詞から『お江戸日本橋』ともいう。

へお江戸日本橋七ツ〔午前四時前後〕立ち、初上り、行列揃えてアレワイサノサ
　　コチャ高輪夜明けの提灯消す、コチャエ、コチャエ……

なお、こちゃえ節は明治四年頃と同二十七年頃にも再流行した。

大弓　半弓〔楊弓〕に対して普通の弓をいう。長さ七尺五寸〔二・三メートル〕前後。娯楽的矢場〔弓場〕は文化〔一八〇四―一七〕頃には、既に両国・浅草・芝神明、その他の寺社の境内とか盛り場で営業していたが、敷地などの関係で半弓の矢場が圧倒的に多かった。特に半弓の矢場には看板娘・矢取り女がいて盛んに風紀を乱し、客もまた、それを目当ての連中が多かった。最盛期は明治二十年前後、もちろん当時は矢は付けたりで、多くは売春宿であった。なお、同三十年頃浅草だけで約五十軒あった。

土器投げ　山の高所から谷へ扁平のごく薄い土器を投げて、舞い落ちる様子を楽しむ遊び。川柳に〝かわらけが逸れて桜の花が散り〟〝かわらけを投げる手付きで芸者飲み〟などとある。

江戸から明治へかけては愛宕山だけでなく各地で行なわれていた。一例だが、江戸の飛鳥山・道灌山にもあった。当時、飛鳥山の真下は小川を隔てて一面が田圃であり、力余って投げると川を越して田の中へ度々落下した。もちろん百姓から苦情が続出。ところが知恵者はいつの時代にもいたとみえて、土器の代りに乾し固めた粘土板を使用することになった。茶店は仕入れが安くなり、百姓は客土の手間がはぶけるという訳である。なお、土器投げは、現在も愛宕山その他で行なわれている。

ここに三枚かしこに五枚　歌舞伎『慶安太平記』（別名題）の俗に「堀端の場」で、丸橋忠弥が朝から飲んだ酒量を次のように述懐する件の有名なセリフをもじったもの。

「……まず今朝家で朝飯に迎い酒に二合飲み、それから角の鱒屋で熱いところをちょっと五合、そこを出てから蛤で二合ずつ三本飲み、それから後が鴈鍋にいい生肌鮪があったとこから又刺身で一升、とんだ『無間の梅ヶ枝』だが、ここで三合彼処で五合、拾い集めて三升ばかり、これじゃあ終いは源太もどきで鎧を質に置かざあなるめえ……」

嵯峨竹　京都の嵯峨は竹の名所で、到る所に竹の藪があった。嵯峨竹は特に弾性が強く、箍に巻いても、ほぐせば必ず元のようにピンとはね返るという。一八はこれに眼をつけて竹に紐をからげ、一気にはね登った訳である。

相変わらずおなじみのお笑いを申し上げることにいたします。山遊びてえものが東京にございませんな。もっとも東京には山という山がないと言ってもいいくらいなもんで……。京都にはいろいろな遊びがございます…山の。……松茸狩り、菜種狩りなんていう、四季それぞれに昔からございますな。

「(大店の旦那らしく下手へ) あらかた…見物をしたな」
「(幇間一八、上手へ) ええ…今日は大将どういう趣向で？……」
「きょうはな、愛宕山へ連れてくよ」
「(腑に落ちない気持で) へえ…愛宕山といいますと？」
「(上手を指し) 向こうに見えるあの山だ。……貴様ァ登れるか？」
「(世辞笑い) はッははは……あれへ登るんですか……へへえ」
「貴様あやしいな」
「(胸を張り) 冗談いっちゃァいけませんよ、あたくしだって江戸ッ子ですよ、えゝ。…あんな山の一つや二ッつ朝飯前ッ」
「おいおい、此間っから一遍…貴様に小言いおうと思ってたんだがな、お前…朝飯前ッてェのはいい言葉じゃないよ」
「そうですか？」
「『そうですか』ッて、貴様登ってみろ、なかなか辛いぞ……」
「(不服そうに) 左様ですかね…(見廻しながら) 大将！ これ、ぞろぞろぞろぞろ行きますのはみんな、この…山へ登るんですか？」
「そうだよ」
「旦那…あそこで喧嘩してますね」
「酔ッぱらいだ、相手ッなるなよ」
「へッへへへ……旦那、酔ッぱらいでね、一句浮かみました」
「生意気なこと言うなよ」
「そうでございません。……どうです？ こういうのは……〝早蕨の握りこぶしを振り上げて、山の頬面春風ぞ吹く〟

と…（自慢げに）どうです」
「えらいね。（にこやかに）お前、やるんだね……面白いな、ェえ？　……〝早蕨の握りこぶしを振り上げて山の頬面春風ぞ吹く〟…（感心して）面白いな、うん。サワラビ……一八、早蕨ッて何の事たか知ってるか？」
「えゝ…（扇子で膝をポンと一つ叩き）つまり…この、なんですな…この早蕨てえことにつきましてはね、ずっと…この、あのゥ…（扇子を左手に持ち替え左方へ伸ばし）早蕨てえことになっておりまして……」
「いえ、だからさ、早蕨て言どういうもんだい？」
「え、早蕨と申しますとね、あれは…このゥ…ずゥっと…このね、えェ……すべてがこのォォ早蕨ッなってます」
「早蕨てえのは、どういう形のものだてッ」
「『どういう形のもの』ッてねえ、貴方ァくどいからいけないよ、あなたは。……早蕨と申しますとこう…（しどろもどろに、両手で形を示しながら、やや早口で）まァるくなったやつがあるかと思うと、三角ッなったやつがある、かと思うとこう四角……」
「馬鹿なこと言うなよ、貴様ァ盗んだな、その狂歌」
「いえ、あたくしの腹から……」
「馬鹿なこと言うな。…早蕨というのはな、蕨の出始まりのことを言うのだ。握りこぶしを（右手の握り拳を見せ）こう…握ったような形ッなってる。……（握り拳を静かに揺り動かしながら）〝早蕨の握りこぶしを振り上げて山の頬面春風ぞ吹く〟と掛け調ッなってる、貴様がトントントントン…とやってみろ、感心ッてんで…十円札〔時には一両〕の一枚もやるんだ」
「（がっかり声）あ、左様ですか、へえ。こりゃなんですね、手焼きてえものはあるもんですね。（口調を改めて）旦那の前でござんすがね、早蕨と申しますと、この蕨の出始まり……」
「な、な、なんだい、今俺が言ったんじゃねえか」
「でござんすからさ、まるまる十円いただこうてんじゃないんですよ。そこんとこ、せめて二円だけ……」
「しみったれなこと言うなよ、おい。……それァそうと、女どもはどうした？」
「（下手を指し）あんなとこで摘み草ァしてますよ」
「呼びなさい！　呼びなさい」
「（声を張り）みなさァァん！　早くいらっしゃいよゥう…
…（笑を含み）ヘッヘッヘ、どうです、駆け出して来ました

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com